

東京音楽大学 第56回芸術祭

「フィガロの結婚」

東京音楽大学 オペラ研究サークル Da capo ... al fine. 第15回公演

2019年11月3日 池袋キャンパス J館スタジオ



芸術祭のイベントとして、池袋キャンパスJ館スタジオで、オペラ「フィガロの結婚」が上演された。上演したのは“Da capo ... al fine.”（ダカーポ アルフィーネ）。芸術祭でオペラを上演するという意志のもとに集まった学生サークルだ。発足から14年を迎えるという。

例年のとおり、客席は満席だ。

序曲がはじまった。2管編成のオーケストラが、これこそ「フィガロ」という小気味いいテンポで進んでいく。それと同時に、これからのストーリーを予告するかのようにも早くも歌手たちが舞台上に現れた。そして1幕が開けると、本来のト書きでは登場しない歌手が舞台の奥、両脇から見え隠れする。プログラムに掲載された演出家（エルマンノ・アリエンティ講師）による作品ノートによると、「フィガロ」は物語の後ろにたくさんの小さな物語があり、それは場面に出ていない登場人物に関わるストーリー、とのこと。それを見せることで、背景を暗示したり、これはどういう意味なのだろうと考えさせる演出だ。なるほどと思った。

普段は<長い>と感じる「フィガロ」も、まったく飽きることなく4幕に入った。今回は通常カット

されるマルチェリーナのARIA、バジリオのARIAが演奏された。改めてここには、このARIAがあるべきなんだと実感させられた。

さて終幕もいよいよクライマックス。全ソリストが登場し、大団団を迎える。フィガロと夫人を厳しく糾弾していた伯爵は、自らの誤りを認めて、皆（統治者！が配下の者）の前で膝をつき許しを請い、夫人はこれを許す。ひときわ感動的なシーンで、モーツァルトの音楽は限りなく美しい。このフィナーレゆえに「フィガロの結婚」は永遠の名作であり続けるだろう。それとも世界中で、不寛容、排除と分断が大手を振る今日、「謝罪と許しによる和解と共生」という理念は、古臭い啓蒙時代の楽観主義に過ぎないのだろうか。



▲ 舞台全景





来場者の声

- 「院生です。学部生が、これだけががんばっているのので、いい刺激となりました」
- 「早稲田のオープンカレッジでエルマンノ先生にイタリア語を習っています。毎年来て楽しんでいます」
- 「知人に勧められて来ました。オペラを観るのは、はじめてです。これプロではなく学生ですよ。ほんとうに驚きました」

(広報課員)